槐

芥川龍之介

槐（ゑんじゆ）と云ふ樹の名前を覚えたのは「石の枕」と云ふ一中節（いつちうぶし）の浄瑠璃（じやうるり）を聞いた時だつたであらう。僕は勿論一中節などを稽古するほど通人（つうじん）ではない。唯親父（おやぢ）だのお袋だのの稽古してゐるのを聞き覚えたのである。その文句（もんく）は何（なん）でも観世音菩薩（くわんぜおんぼさつ）の「庭に年経（としへ）し槐（ゑんじゆ）の梢（こずゑ）」に現れるとか何（なん）とか云ふのだつた。

「石の枕」は一（ひと）つ家（や）の婆（ばあ）さんが石の枕に旅人を寝かせ、路用（ろよう）の金を奪ふ為に上から綱に吊（つ）つた大石（おほいし）を落して旅人の命を奪つてゐる、そこへ美しい稚児（ちご）が一人（ひとり）、一夜（いちや）の宿りを求めに来る。婆さんはこの稚児（ちご）も石の枕に寝かせ、やはり殺して金をとらうとする。すると婆さん

の真名娘(まなむすめ)が私(ひそ)かにこの稚児に想ひを寄せ、稚児の身代りになつて死んでしまふ、それから稚児は観世音菩薩(くわんぜおんぼさつ)と現れ、婆さんに因果応報(いんぐわおうはう)を教へる、この婆さんの身を投げて死んだ池は未(いま)だに浅草寺(せんさうじ)の境内(けいだい)に「姥(うば)の池」となつて残つてゐる、――大体かう云ふ浄瑠璃(じやうるり)である。僕は少時(せうじ)国芳(くによし)の浮世絵(うきよゑ)にこの話の書いたのを見てゐたから、「吉原八景(よしはらはつけい)」だの「黒髪」だのよりも「石の枕」に興味を感じてゐた。それからその又国芳の浮世絵は観世音菩薩の衣紋(えもん)などに西洋画風の描法(べうほふ)を応用してゐたのも覚えてゐる。

僕はその後(ご)槐(ゑんじゅ)の若木を見、そのどこか図案的な

枝葉（えだは）を如何（いか）にも観世音菩薩（くわんぜおんぼさつ）の出現などにふさはしいと思つたものである。が、四五年前（まへ）に北京（ペキン）に遊び、のべつに槐（ゑんじゆ）ばかり見ることになつたら、いつか詩趣とも云ふべきものを感じないやうになつてしまつた。唯青い槐の実の莢（さや）だけは未（いま）だに風流だと思つてゐる。

北京（ペキン）

灰捨つる路は槐（ゑんじゆ）の莢（さや）ばかり

（大正十五年十月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。